

な話をしているのですが、平成13年と15年に国土交通省に頼まれて、リコールが何故上手くいかないかという調査分析委員会の委員長をやっていました。それで、本当に守秘義務の約束をして、いろいろな自動車のメーカーの品質保証の人と、ずっとヒアリングをやり続けました。そして、この一つずつのリコールは、どういう経過でどういう様子だったかというのを丁寧に聞いていたのですね。それでいぶんいろいろな事がわかつてきて、みなさんにきちんとその事を伝えるつもりで初めからやったのですが、平成15年の時に三菱自動車のあんまり大がかりなリコール隠しが起こったので、実は役所もどこもあれにもみくちゃになって、結局最後はそれがなくなったのです。最後には、ずっと何年も経ってから最終報告書はできたのですが、その時に僕が自分で学んだ事は、やはり失敗を失敗として認めるというのは、ものすごくつらい事で、なるべく失敗でないよう、物を見たいというふうに誰でも思うのだと思いました。先ほど、見たくないものは見えないと書いた絵は実はそれで書いたのです。そういうふうに見ると、たとえば、何かのリコールで、インチキじゃないかというので責め立てるのは簡単だけれども、本当に自分が会社の中の品質保証をやる人の立場になってみるとほんぽつんと起こることが、先ほど、もう一方、こちらで見せた根っこの方を見なきゃ駄目だぞという絵なのです。根っこで繋がっている事なのかどうかを見極めるというのは、ものすごく難しいです。難しいけれどもやらなければいけないと思ってやる時に、先ほど言ったような個の独立や、それからもう一つは、自分は社会から何を預託されているのかという職業人というか社会人というか、何か自覚を持たなければいけない時が来て、つらいけれども、そっちを優先するという所までいかないと、後から見ると、隠していたあのインチキだの、言い訳しただのと言われてしまうのです。でも、人間ってそんなに強くないからどうしてもそうではないという方に行きたくなるんです。だから、そこまで考えた時に、社会全体がものすごくちゃんと動くには、やはりある種の寛容さと、僕ら自身がいろいろな意味で社会・文化的にあるステップを超えて一段上に上がる、そういう度胸がいるんじゃないかなという気が非常にします。そういう意味では、いま起こっているよ

うなリコールの問題には、一面的な方法とか考え方ではなくて、それこそ、平成13年に国土交通省から頼まれたような、あの方の検討を至急、もう一回始める方がいいのではないかという感じがします。それで、そこで出てきたものをきちんと社会に伝えた時に、それこそ安心の社会になってくるのではないかと思って仕方がないのです。何も隠しているというよりも出さないでいる事の方がいけない気がします。

【小出】 今のお話をうかがっていて思い出したのですが、話の次元は違いますが、戦争をやると必ず連合軍が勝つのです。それで、英国の国防部が出た、英國から見た太平洋戦争というのが、その中の最大のテーマがナポレオン戦争以降、なぜか連合軍がいつも勝つ。戦争というのは効率性の勝負だと。効率性から言ったら、連合軍というのは一番非効率だと。寄り合い所帯だから。それにも関わらずなぜ連合軍が勝つかというテーマでずっと太平洋戦争のいろいろな作戦を、さわりだけ紹介しますと、簡単に言うと、連合軍の作戦というのはジグザグなのですよ。最初にアメリカ軍がイニシアティブをとって、あれやこれやれと。でも、人間名参謀といえども神様じゃないから、必ず現実とずれるわけです。するとずれているという情報が現場から入ると、イギリス軍がこれを変えようと言うのです。そうするとイヤだって。最大の場面は、英國の参謀が米軍参謀にけん銃をつきつけて、変えよと。変えなければお前を撃って、俺も自決するという。だから、連合軍の参謀本部というのは、そういうのが連続するわけなのです。それでそうかと言って渋々アメリカが、アメリカの参謀は実情が見えないというか見たくないのです。それで英國参謀によって変える。それでも変えても微妙にズれる、それじゃあ、これに変える、というふうにジグザグで最後はストライクに当たるのです。でも、片一方の日本軍の作戦というのは、いったん決めたら、不退転の決意で行けというわけですよ。それで絶対に現実とずれるわけです。ズれるのはお前たちの努力が足らないからだと。それを変えようとすると決めた奴の責任はどうなるとか、メンツはどうなるとか、それでみんな現場に責任を押しつけて、それで最後は玉砕するわけですが、